地獄の底の子供たち

フォトジャーナリスト・豊田直巳の
緊急報告リポート

インド北東部において、21世紀の今日になっても続く炭鉱児童労働

インド北東部、メガラヤ州ジャインティア高地。日本では「黒いダイヤ」と呼ばれた石炭の坑道が無数にある。

すべり落ちる恐怖に必死に耐えて、縦坑の側壁の腐りかけた手製の階段を50メートル下りると、そこは地獄だ。流れ落ちる地下水に濡れながら蠢いているのは炭鉱作業員たち。石炭と泥で汚れきって真っ黒になった体にも頭にも、身を守るものはなく、ただ石炭を掘るためのつるはしとヘッドライトだけが唯一の彼らの武器だ。

その地獄の底に、子供たちがいた。仕事に大人と子供の区別はない。むしろ体が小さいことで、過重労働を強いられる現場もあるという。縦坑の底に広がる石炭層を掘り進める〝ネズミ穴〟のような狭い坑道では都合がいいと。

その姿は、歴史の教科書に出てきた200年以上前の産業革命時代の炭鉱労働と変わりない。15歳の少年は「少しでも親を助けたい」と健気に言った。その同じ口が「去年、坑道が崩れて友人が生き埋めになったよ」と、特別な感情を表すこともなく言ってのけた。

心あるマネジャーのひとりは、落盤や滑落、坑道にあふれた地下水による溺死事故の多発を告発する。昨年は一度に81名が水死したと。

インドも批准しているILO（国際労働機関）の最低年齢条約もインド憲法も、児童労働禁止法も通用しないこの一帯だけでも、今日も何万という子供たちが働いている。

撮影・取材・文　豊田直巳

横穴で石炭を切り出し、手押し車で縦坑の底に運び出すことの繰り返しが続く

掘り出した石炭を地上に運び上げるためのコンテナが下りてくる間がつかの間の休みだ

「お金のためには
働かなきゃならない
……夢はないけれど」

炭鉱の外で選別された石炭をトラックに
運び込む。ここでは大半の仕事が人力だ

隣国ネパールやバングラデシュから来た労働
者や子供は不衛生な宿舎に住んで仕事をする

ネパールから来た13歳の少年らが、石炭掘
りの合間につるはしを修理していた

クレーンが壊れた炭鉱では石炭を
50メートル運び上げるのも人力で、
滑落事故が絶えないという